

職朝での校長挨拶 26

おはようございます。この風変わりな職員朝礼も今日で最後です。

人間が自分の罪に向き合い、他者に心から謝罪し、あるいは他者を赦すことができるのは、自己関心を離れた「人間」が見えたとき、同じ悲しみを抱える「人間」が見えたときです。この時始めて「人間は人間に対して人間である」という相互承認が成立し、人間は人間になります。人間は自分の力で人間であるのではなく、気づかされて人間になるのだと思います。

これは道徳と宗教という古い問題でもあります。道徳は「汝なすべし」と命じます。これは自分を越えた所から起こる無条件の命令です。人間はその声を良心の声として知っています。これを無視することは出来ません。他方、不安を抱える人間は自己関心から離れられず、その意味では道徳の命令に従うことが「出来ない」。真摯に考えれば考えるほど「出来ない」。道徳に真摯に向き合うとは道徳に挫折するということです。ここに生き方の転換があります。自分が生きているのではない、「どこまでも分からない深いもの」によって、罪を抱えたまま、生かされて生きている、そこが出発点となります。そうしてこの「どこまでも分からない深いもの」を学ぶことが「人間を学ぶ」と言うことです。

ありがとうございました。本日もよろしくお願いいたします。